言語景観を活用した日本語教育研究の展望

磯野　英治

1. はじめに

本論文の目的は、言語景観を活用した日本語教育研究、および日本語教育実践について、①これまでの先行研究を時系列で分かりやすく整理し、②今後、発展的にどのような言語景観が活用可能かの二点について論じることである。言語景観研究の論点は、社会言語学や日本語学が中心であり（地域研究や方言研究、敬語研究含む）、とりわけ日本語の言語景観を扱った研究は、ここ十数年でようやく発展してきたと言える。そして、言語景観がこれらの研究分野だけではなく、日本語教育・学習のための素材として有用であることが指摘されはじめ、授業実践についても論じられ始めている。本論文では上述の①に関して、まず「言語景観とは何か」といった観点からその定義や対象を確認し、言語景観研究の歴史を概観する。その上で、言語景観を活用した日本語教育研究について、先行研究の諸特徴を時系列に整理し、具体的な授業実践（教材・カリキュラム）を紹介する。その後、②に関してテーマ別に言語景観の例を示しながら、今後の日本語教育における言語景観の活用について検討する。

2. 言語景観とは何か

ここでは主に日本語の言語景観について、定義と対象を確認した上で、日本国内と海外の言語景観の違いについて確認する。まず、言語景観は公共空間にあり、不特定多数に向けられている、自然に視野に入る書き言葉を指す。その対象となるのは看板、掲示物、のぼり、ポスター、ラベル、ステッカー、シールなど様々である。言語景観（英語では"Linguistic landscape"）は「特定の領域または地域の公共的・商業的表示における可視性と顕著性（はっきりと視界に入るもの）」（Landry & Bourhis 1997）と定義されているほか、日本でもInoue（2005）や庄司ほか（2009）によって論じられており、外国語を含む多言語景観を「公共の場においてさまざまな形で知覚される、外国語が複合的に形成する」（庄司ほか2009）　ものと位置づけている。総じて言語景観は、端的には公共空間にあること、そして可視的であること（つまり書き言葉）というふたつの条件が必要であり、街中のあらゆる表示が対象になると言える。以下に言語景観の定義や対象をまとめる（表1はロング2010、磯野2011a,bをまとめた磯野2020）。

表１　言語景観の定義・対象

言語景観の定義	a. 文字言語（視覚的）であって、音声言語（聴覚的）ではない。 b. 公的な場に見られる文字言語であり、私的なコミュニケーション（個人間で交わされる手紙やメールなど）ではない。

	c. 不特定多数の読み手に向けて発せられる物で、特定の個人宛てに書かれたものではない。 d. 自然に、あるいは受動的に視野に入る物で、意識的に読まなければならない物（手にとって読む雑誌の中の記事など）ではない。
言語景観の分け方	a. 公共表示：公共施設、公共利用物にある商用ではない表示（空港・駅・道路・電車・バス・タクシー・商業施設内のトイレ表示など） b. 民間表示：公共施設や街中にある商用表示（店舗や企業の広告）
対象	看板、掲示物、ポスター、ラベル、ステッカー、シール、のぼりなど

次に、日本国内と海外の言語景観の違いについて確認する。まず日本国内の言語景観は、外国人集住地域に見られる外国人が作ったものを除き、そのほとんどは日本人が作ったものである。そしてこれらは、日本語のみの単独表記になっているものだけではなく、例えば首都東京をはじめとする大阪、名古屋、福岡などの都市部の公共表示は「日本語・英語」の二言語併記や「日本語・英語・中国語・韓国語」の四言語併記が主流である。全国的にも都市部では、この標準タイプ（田中ほか2012）と呼ばれる四言語併記のものがよく見られる[1]。一方で、民間表示でも外国人観光客への便宜や拡販目的、そして定住外国人向けの多言語化が進んでいる（磯野・引田ほか2013、磯野・上仲2014、磯野・上仲・大平・田中2016、磯野・上仲・田中2018、上仲・田中・磯野2019、磯野2020）。以上、まとめると日本国内の国際化、多民族化に伴う多言語化（内なる国際化、磯野2012）が加速していると言える。これら外国語が併記してある言語景観は「多言語景観」と呼ばれる。次に、海外で見られる日本語の言語景観は、そのほとんどがその国、あるいは地域にいる日本語非母語話者が作ったものである。日本語の言語景観が見られる範囲は、空港や駅などの公共表示、日本人観光客がよく訪れる観光地や日本人定住エリアの公共・民間表示が中心であり、その他として、日本（日本食、日本製品、日本文化など）を売りにする店舗が各地に点在している。こうした海外における日本語の言語景観は韓国を筆頭に、中国や台湾、タイ、インドネシアなど、東アジアや東南アジアの都市を中心に数多く見ることができる。また、東アジアや東南アジアよりも数は少なくなるものの、アメリカやブラジル、ヨーロッパに点在する日本人定住地域（日本人街）には、飲食店を中心とした日本語の言語景観が少なからずある。以下の言語景観の具体例は、日本国内・海外の公共表示と民間表示の特徴を写真1-4で示している。

[1] 例えば、福岡では韓国に近いという地理的近接効果の影響で、韓国語と中国語の順序が逆になるが、こうした現象は、地域の特徴によって各地で見られるものである。

写真1 日本国内の公共表示

写真2 日本国内の民間表示

写真3 海外の公共表示

写真4 海外の民間表示

3. 言語景観研究の歴史

言語景観研究は、現在盛んに研究されている分野であるが、言語景観に見られる諸特徴を言語学的な分析対象とすること自体は、新しい試みではない。例えば、日本国内の研究では、地理学者の正井泰夫が1962年に実施した店名看板の調査である「新宿の都市言語景観調査」（正井（1972）『東京の生活地図』所収）があり、海外ではユール・ジョージ『現代言語学20章 ことばの科学』（大修館書店1987、原著はCambridge University Press 1985, The Study of Language First Edition）に挙げられている語用論分析の観点からの看板の写真がある。しかしながら、言語景観研究としてのまとまった形の調査、とりわけ日本語の言語景観を扱った研究は、ここ数十年でようやく発展してきたと言える。ここでは、特に2000年代に入ってから様々な角度から言語景観研究が行われ、刊行された日本語で書かれた書籍4冊を取り上げる。

(1)『日本の言語景観』、庄司博史・P. バックハウス・F. クルマス編、三元社、2009年（写真5）

総論として言語景観を論じたまとまった書籍としては、嚆矢となったものであり、日本の言語景観を多言語化、経済言語学、公共圏の起源、地域差、ローマ字表記、行政的背景、視覚障害者と点字、移民言語の観点から論じている。既述の正井（1962）

の研究や言語景観に相当する英語である"Linguistic landscape"の定義（Landry & Bourhis 1997）に関する言及もある。

(2)『世界の言語景観 日本の言語景観－景色のなかのことば－』、内山純蔵 監修、中井精一・ダニエル ロング編、桂書房、2011年（写真6）

日本および海外の言語景観について、多言語化と研究の方法論的展望の二つの観点から論じられている。多言語化では、少数言語のアイデンティティやロマンス語圏少数言語地域の実態調査、中国ハルビン市・チャムス市や韓国ソウル特別市・釜山広域市・大邱広域市、北海道・サハリンの比較分析、大阪市大正区における沖縄関連の調査が報告されている。一方、研究の方法論的展望では、日本語教育への応用、社会分析ツールや記録の方法論、禁止表現の多様性の分析、地方都市の文化論などが論じられており、国内外の言語景観を対象に、そのテーマは多岐にわたっている。本論文と関連するテーマとして「韓国における日本語の言語景観－各都市の現状分析と日本語教育への応用可能性について－」（磯野2011b）という論考があり、言語景観の日本語教育（および言語教育）への活用が書籍の中で論じられたのは、これが初めてである。

(3)『街の公共サインを点検する－外国人にはどう見えるか－』、本田弘之・岩田一成・倉林秀男、大修館書店、2017年（写真7）

日本の公共サインの問題を指摘し、その改善策を提案している。当該書籍は、ある地域のサインとそれを掲示した住民の意識を探ったものが言語景観研究であるとし、外国人ユーザーの視点から日本人にはなかなか気がつかない日本のサインの問題を当該書籍では扱っているので全く異なるものであるとしている。このため、扱っているデータは言語景観だが、本論で示しているような先行研究には一切言及がない。外国人にも分かりやすい公共サインは街づくりの基礎であり、ユーザーの立場から整備されなければならないという立場から、様々な観点（英語・ローマ字、ピクトグラム、道路、観光、駅、トイレ、注意喚起、防犯・防災など）から公共表示が扱われている。

(4)『ことばと文字』11号（「特集」言語景観研究）、くろしお出版・公益財団法人 日本のローマ字社、2019年（写真8）

現在の日本にとって重要な①出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」、②言語景観と留学生のための日本語教育の新しい関係、③2020年オリンピック・パラリンピック東京大会と2025年大阪・関西万国博覧会の開催という三つの課題と、言語景観研究の接点から組まれた雑誌の特集である。①は今後の日本社会の多民族・多文化・多言語化の進行、②は身近に存在する言語景観を活用した先駆的な日本語教育実践、③は国家的行事として外国人を受け入れるための多言語表示・サービスの整備の観点から、言語景観研究の重要性が論じられている。特集では、戦争と経済と国際化の観点から言語景観の歴史、韓国安山市の外国人集住地域における公共・民間表示の多言語景観調査から日本の言語政策への提言、言語景観を活用した上

級日本語学習者への教育実践、大阪道道頓堀の多言語景観からその国際化を調査、という計5本の論文が収録されている。

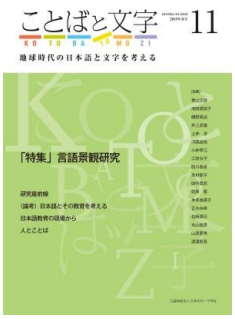

写真5　　写真6　　写真7　　写真8

庄司ほか編（2009年）中井・ロング編（2011）本多ほか著（2017）雑誌（2019）

4. 言語景観を活用した日本語教育研究の潮流

街中にある看板やポスター、ラベルやステッカーなどの書き言葉がレアリアなどとして授業の一部に活用されることはこれまでにもあったが、自然と目に入るこれらの身近な書き言葉を「言語景観」と定義、明記して「教育に生かすためのまとまった論考や教材の提供」を行ったものはない（磯野・西郡2017、磯野2020）。しかしながら、既述のように言語景観研究の広がりに伴って、言語景観が教育・学習のための素材として有用であることが指摘されはじめ、授業実践についても論じられ始めている。ここでの「指摘」とは、言語景観を言語・社会研究だけではなく、日本語教育や異文化コミュニケーション、社会言語学の教育に活用できるのではないかという観点と方法論に関する試論、そして「授業実践」とは、授業における事例的な導入や部分的な活用、加えて発展的には言語景観そのものを授業の中心におくような教材作成や1科目としてのデザインを指し、それぞれ以下のa–cのようにまとめることができる。

a．言語景観を教育に応用するための観点と方法論に関する研究（磯野2011a, b、2013, 2015a、ロング2014, 2017, 2019）

「2. 言語景観研究の歴史」で示したように書籍、および論文で言語景観の日本語教育への活用が初めて提案された磯野（2011a, b）のほか、活用する視点や活用する際の分類方法、日本語学習者にとって分かりにくい言語景観の指摘などが論じられている時期である。

b．言語景観を部分的に活用した教育の事例研究（鎌田2014、磯野・西郡2015, 西郡・黒田ほか2016、李2019、池田2019、甲賀2019）

鎌田（2014）では、学部専門科目である「日本語教育方法論」という授業で、身の回りの漢字に注目し、言語景観を素材とする写真を活用した漢字テキストを4～6名の

グループで完成させる試みを授業の一部に取り入れていることを報告している。その後、磯野・西郡（2017）で報告されているように、初級から上級科目までの日本語教育科目、学部の教養（共通教育）・専門科目、ゼミ、大学院科目など様々な科目の中に、言語景観の授業における部分的な導入と活用が見られるようになってきた。また最近では、韓国の大学における通常授業（「日本語語彙論」）での導入（李2019）や、留学生が日本の大学で集中的に日本語を学ぶための短期日本語研修における活動（甲賀2019）など、言語景観の部分的な活用が多岐に渡り始めている。

c．まとまった教材の提供と言語景観を中心に据えた教育実践（磯野2015b、磯野・西郡2017、磯野・西郡2019、磯野2021）

上記のa、およびbの基礎的研究を踏まえ、言語景観を教材としてカリキュラムの中心に据え、授業実践を行った萌芽的な報告である磯野（2015b）を嚆矢として、上級日本語教育や日本人学生との混合授業である多文化コミュニケーションや異文化コミュニケ―ション、留学生ゼミなどでの言語景観を活用したまとまった教育実践が行われはじめている。

上記a-cの言語景観を教育に活用するための研究・教育の変遷をたどると「教育に活用できるのではないかという観点と方法論に関する試論」から始まり、比較的短い期間の間に、その授業実践までが行われてきているというように概観できる[2]。

次に、言語景観を活用した日本語教育について言及、あるいは中心にまとめられている書籍を3冊、ビデオ教材を2本取り上げる。

(1)『都市空間を編む言語景観』、ダニエル ロング・中井精一 監修、李舜炯 編、中文出版（韓国）、2019年（写真9）

韓国で出版された初めての言語景観に関する書籍であり、日本と韓国で言語景観研究をリードする教育・研究者らが第一部「地域とコミュニティ」、第二部「言語景観と日本語教育」の二つの観点から論じている論文集、研究書である。第一部では言語景観研究の展望、地域や対象（境港と妖怪文化、米軍基地と地域コミュニティ、対馬の韓国語、ブラジル人集住地域、韓国の商品販売売場の日本語など）に特化した事例が取り上げられている。第二部は言語景観と日本語教育を関連させ、ある程度まとまった議論や事例があり、その意味でこのような書籍の刊行は初めてのものと言える。

(2)『言語景観から学ぶ日本語』、磯野英治 著、大修館書店、2020年（写真10）

言語景観を活用した1科目、1コースとして成立する教科書、学習書として作られた

[2] 本論文は「1. はじめに」で述べたように、言語景観を活用した日本語教育における先行研究の諸特徴を時系列に整理することに主眼が置かれているため、各論文に関しては参考文献を参照されたい。

はじめての書籍であり、一言語としての「日本語」を段階的に学ぶことができる。上級日本語教育、日本人学生向けの異文化コミュニケーション、社会言語学で活用でき、後述のビデオ教材（5）や教師用資料とも連携している。具体的な学習ができる15レッスン（各レッスンに考え方・実践篇・応用篇）が易から難に編まれており授業、自学自習のいずれでも段階的な言語・文化学習が可能となっている。

（3）『言語景観から考える日本の言語環境－方言・多言語・日本語教育－』、ダニエル ロング・斎藤敬太 著、春風社、2022年（写真11）

副題の通り、方言、多言語、日本語教育の観点から四部構成になっており、それぞれ19章で各論が編まれている研究書である。第Ⅰ部（1-5 章）は「無敬語地帯・敬語地帯における言語景観」、第Ⅱ部（6-11章）は「複言語使用地域における言語景観」、第Ⅲ部（12-15 章）は「方言主流社会における言語景観」、第Ⅳ部（16-19 章）は「教室における言語景観」という概要となっている。特に第Ⅳ部では、言語景観の教育への活用を日本人学生、日本語学習者と論点を分けた上で、言語景観が資料としてどう応用できるかについて検討し、授業実践を紹介している。

写真9
ロング・中井 監修 李 編（2019年）

写真10
磯野 著（2020）

写真11
ロング・斎藤 著（2022）

（4）ビデオ教材『東京の言語景観－現在・未来－』、西郡仁朗・磯野英治 監修、東京都アジア人材育成基金、You Tube
（https://www.youtube.com/watch?v=NHV338g_NBo）、2014 年（写真 12）

このビデオ教材の制作目的は（1）日本国内外の教育・研究者が教材や研究用資料として視聴でき、（2）実際に日本語教育関係の授業に導入すること、の2点であり、日本語教育に言語景観を活用する目的で制作されたはじめての視聴覚教材である。その内容は、2020年開催予定のオリンピック・パラリンピック東京大会に関連させて東京都の言語景観の諸特徴に言及するものであり、公共表示の多言語状況から何が分かるか、民間表示からどのような地域の特徴や社会的背景が読み解けるのか、といった「観点

の習得」に主眼が置かれている。構成は「言語景観とは何か」についての概説、2014年現在の東京都の公共表示と民間表示の状況（共通性と多様性）、東京都オリンピック・パラリンピック準備局による多言語対応についてのインタビューから成っている。このビデオ教材は、8言語による外国語字幕版も同時に制作を行っており（英語・中国語（簡体字・繁体字）・韓国語・インドネシア語・ベトナム語・モンゴル語・フランス語）、教育機関での活用や社会への情報提供のために、動画共有サービスYouTubeで無償公開されている。

(5) ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』、磯野英治・西郡仁朗 監修 2017 年度～2020 年度科学研究費若手研究(B)研究課題番号 17K13490「言語景観を教材とした社会文化的理解を目指す内容重視型日本語教育の研究」（研究代表者：磯野英治）、YouTube（https://www.youtube.com/watch?v=qB0-eSC_yUQ）、2019 年（写真 13）

上述の書籍（2）『言語景観から学ぶ日本語』と連携している視聴覚教材で、ビデオ教材の1～15回は当該書籍のレッスン1～15と全てセットになっている。このため、当該書籍を使用する際に、このビデオ教材の活用が学習効果を高める仕組みになっており、書籍が主教材、ビデオ教材が副教材という位置づけである。既述のように、街中にある看板やポスター、ラベルやステッカーといった書き言葉がレアリアなどとして授業の一部に活用されることはこれまでにあったが、自然と目に入るこれらの身近な書き言葉を「言語景観」と定義、明記したまとまった論考や教材はこれまでになかった（磯野・西郡2017、磯野2020）。その中でこのビデオ教材は、言語景観を素材として日本語教育や異文化コミュニケーションに活用できる「まとまった教材」を目指し、制作された。具体的には言語景観を活用した教育を「1科目」として位置づけ、学期中の毎回の授業で使用できるよう「毎回の授業の冒頭で使うその日のテーマに沿ったショートビデオ（3～5分）×全15回」を1本のビデオとしてまとめている。ビデオ教材のターゲットは日本語教員・学習者（主に上級）を中心に、日本人学生向けの教養・専門科目である「社会言語学」や「異文化コミュニケーション」などの科目にも活用することを視野に入れている。

写真12
西郡・磯野 監修（2014年）

写真13
磯野・西郡 監修（2019）

5. 言語景観を活用した言語教育研究の現在

これまでに論じてきたように、言語景観を活用した言語教育は、日本語教育学の分野で活発に議論され始め、まとまった研究も報告されていることが分かる。本章では主に日本語教育学で行われている言語景観を活用した研究・教育、および当該分野からの刺激を受けて行われている日本語以外の言語教育における研究の現在地、すなわち研究の最前線を科学研究費、学会の企画、書籍での紹介から追って報告する。

(1) 言語景観を活用した日本語教育研究の現在

既述のように、言語景観を活用した言語教育は、日本語教育学からその萌芽的な研究が開始され、現在は教育実践までが行われている現状がある。その時系列の歴史、および先行研究は4章までに論じた通りであるが、ここでは現在進行形でどのような内容が発表・報告されているのかを概観する。

まず、科学研究費（文部科学省日本学術振興会）の研究課題名として「言語景観」という用語が使用され、かつ日本語教育と直接関係のある研究テーマは以下の二つである[3]。つまり、後述するように学会等の企画で比較的大きなパネルが組まれるようにはなってきているが、科学研究費等での採択は、まだ少ないということができるだろう。

a. 2017年度～2020年度科学研究費若手研究(B)研究課題番号17K13490「言語景観を教材とした社会文化的理解を目指す内容重視型日本語教育の研究」(研究代表者：磯野英治)
b. 2020年度～2023年度科学研究費（若手研究）研究課題番号20K13093「言語景観を活用した多文化社会への支援に資する内容重視型初級日本語教育教材の開発」（研究代表者：磯野英治)

次に、学会等で行われた比較的大きな共同研究発表や企画等は、現在目立つようになってきていると言える。

c.「日本語教室と世界をつなげる－言語景観の活用方法を探る－」、企画発表、韓国日語教育学会2019年度第35回国際学術大会、明知専門大学、韓国、2019年4月
d.「言語景観を活用して人・地域・国の融合を目指して」、企画発表、韓国日本語学会2020年度第41・42回統合国際学術大会、漢陽サイバー大学、韓国、2020年9月
e.「地域における言語景観研究」、企画発表、韓国日本語学会2021年度第43・44回統合国際学術大会、漢陽サイバー大学、韓国、2021年9月

---

[3] 研究課題名として「言語景観」という用語が使用されていた研究は全体で 8 件ある。その他の研究テーマは地域研究、医療分野における外国人患者への言語対応、多言語表示作成、また後述の英語教育に関するものである。

(2) 言語景観を活用した言語教育研究の現在

現在は日本語教育学のみならず、他言語の教育でも注目されはじめている分野である。ここでは英語教育、および海外の科学研究費について、先駆的な研究を以下に挙げる。

a. 2020年度～2022年度科学研究費基盤（C）研究課題番号20K00822「英語教育に生かす言語景観研究－誤用分析と異文化コミュニケーションの観点から－」（研究代表者：森下美和）
b. 雑誌『月刊英語教育』2021年1月号、書評「大修館の一冊」（『言語景観から学ぶ日本語』について）
c. 多言語景観を活用した日本語教育－教材開発と教育実践について－（国立国語研究所 令和元年度日本語教師セミナー講演）
d. 2019年度～2022年度韓国研究財団一般共同研究事業（韓国文部省科学研究費）研究課題番号NRF-2019S1A5A2A03043546「韓国と日本の言語景観に関する実証的研究―言語接触・言語教育活用・地域活性化を中心に―」

上記のaからcは英語教育を中心とした言語景観の活用に関する研究、および紹介である。aはタイトルの通り言語景観を英語教育に中心的に活用しようとする試みである。bについて、当該雑誌は1952年に創刊された、英語教育に関わる者のための最も歴史ある月刊専門誌であり、発行部数は1万5千部、その読者層は小中高・大学の英語教師、塾・予備校の英語教師、英語教育学や英語学を専攻する大学生・大学院生と幅広いが、その雑誌の中で『言語景観から学ぶ日本語』の紹介と英語教育への導入の意義が評されたものである。cは主に日本語教師を対象とし、数百人が参加したセミナー講演の一つであるが、当該テーマに関心を持つ英語、韓国語等の教育関係者の参加もあった。dは韓国における大型の科学研究費であり、海外においても言語景観の言語教育への活用が注目されていることを裏付ける研究テーマであろう。

6. 具体的な授業実践例

本章では、言語景観を活用した授業をどのように行うことができるのかについて、実際に行われている授業のカリキュラムを紹介する。カリキュラムは2016年から名古屋商科大学で毎年開講されている「異文化コミュニケーション」という学部専門科目であり、身近にある日本語を中心とした言語景観から何が分かるかを学びながら（留学生にとっては目標言語である）日本語で授業を受け、観点や考察力の習得、および授業活動を通じたディスカッションやプレゼンテーションの技術を学ぶことである[4]。

[4] 2020 年に教材が刊行されるまで、授業では私家版を利用していた。また 2016 年以前にも大阪大学で「多文化コミュニケーション（日本語）－ことばの多様性・機能・効果へのアプローチと実践－」という日本人・留学生混合クラスの科目で利用した。

教材は既述の教科書『言語景観から学ぶ日本語』を主教材、ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』を副教材として、以下のようなカリキュラム（1科目における各回授業の概要と1コマの流れ）で授業を行っている。

表 2　各回授業の概要

第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回
言語景観の概論（定義・対象・観点）	公共表示と民間表示の違い	音声と表記	使用文字の多様性とその効果	使用語彙の多様性とその効果
第 6 回	第 7 回	第 8 回	第 9 回	第 10 回
ピクトグラム・記号	正用と誤用	適切性・自然さ	役割・多様性	言語と経済
第 11 回	第 12 回	第 13 回	第 14 回	第 15 回
方言使用と都市・地方	外国人集住地域と国際化・多民族化	電気・サブカルチャーなど特定分野における街の表記	社会的背景や使用意図	語用論的使用

表 3　1 コマの流れ

授業の流れ	学習活動
5-10分 ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』の視聴	内容の概論的な理解
10-20分 教科書『言語景観から学ぶ日本語』の【考え方】の解説	・内容の理論的な理解 ・内容の具体的な理解
15-30分 教科書『言語景観から学ぶ日本語』の【実践篇】の演習	・グループディスカッションによる意見の出し合い ・グループとしての意見の取りまとめ ・口頭で発表 ・教員と学生によるまとめ
15-30分 教科書『言語景観から学ぶ日本語』の【応用篇】の課題1の演習	・グループディスカッションによる意見の出し合い ・グループとしての意見の取りまとめ ・口頭で発表 ・教員と学生による評価

15-30分 教科書『言語景観から学ぶ日本語』の【応用篇】の課題2の提示	・課題2の内容と留意点の解説 ・次回授業までに行う準備の説明（データ収集、口頭で発言できる簡単な資料の作成） ・データ収集や発表準備などの役割分担について、各グループの話し合い促進

実際の授業では、カリキュラムに沿った学習を行うことで受講生たちの言語景観への意識が高まり、かつ「言語景観の諸特徴をどのように観察、分析すればよいのか」を習得しているが、詳しい授業実践の効果については、磯野（2015b、2021）を参照されたい。

7. おわりに

以上、「言語景観とは何か」といった観点からその定義や対象を確認し、言語景観研究の歴史を概観した上で、言語景観を活用した日本語教育研究について、先行研究の諸特徴を時系列に整理し、具体的な授業実践（教材・カリキュラム）を紹介した。それでは今後、発展的にどのような言語景観が活用可能なのか。例えば、街を歩けば分かるように、私たちの身の回りには写真14にあるような注意・禁止表現が無数に溢れており、目にしない日はない。ロング（2014）では、注意・禁止の言語景観を働きかけ機能の観点からその表現形式を「直接的働きかけ」と「間接的働きかけ」に分類し、14の事例を示した上で、言語景観の意図（内容）が非母語話者にとっていかに分かりにくいかを論じている。これらを表現形式別にまとめることで、どのような場所にどのような型の表現形式が多いのか、当該表現形式を使用する狙いは何か、などを考えること、あるいは分かりやすさや難易度に関係なく、日本で生活する上で知っておくべき言語景観として重要であろう。また、日本語はオノマトペが豊富な言語の一つであるが、日本語学習者にとっての習得の難しさは昔から指摘されており、一方で日本語母語話者が日本語のオノマトペを客観的に説明することも、なかなか難しい。しかしながら、街中は写真15のようにオノマトペだらけであることは誰もが認めるところであろう。このような例を多く収集して、オノマトペの使用場面を分類し（例えば食感に多用されているなど）、その効果を考えることは意義のある学習と言えるだろう。その他、言葉の変化（便所⇒トイレ）や特定の表現のバリエーション（病院・医院・クリニック、アルバイト・パート、レディース・レディス・ウィメンズ）なども日常生活の中で身近なテーマである。

写真14 街中にある無数の注意・禁止の言語景観

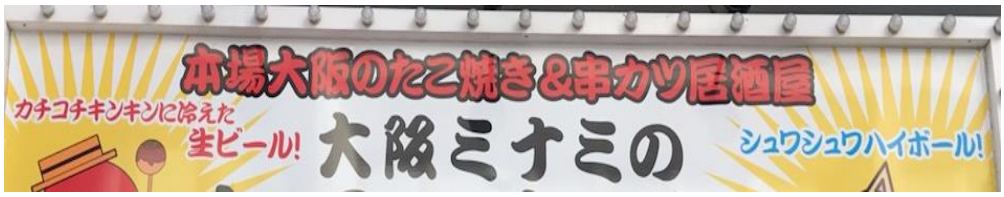

写真15 街中に数多くあるオノマトペが使用された言語景観

総括すると、日本語教育に活用できる言語景観は無数に存在するといってもよく、授業担当者それぞれが学習者の日本語レベルや授業内容に応じて言語景観を収集、選択し、かつカリキュラムに反映させるのかがポイントとなる。言い換えれば、やみくもに導入すればよいというものではなく、以下の二点が重要になる。

(1) 授業に取り入れる必要性と導入のタイミング

(2) 活動としての面白さと導入の有無による学習内容の充実のバランス

言語景観を活用した日本語教育を含む言語教育、異文化コミュニケーションや社会言語学の教育はこれから拡大、発展が期待される分野であることは間違いない。それは、日常生活の中で身近な言語景観が教育の素材として使いやすいということに尽きるだろう。教育に取り入れるに際して、言語景観の事例の提示や羅列、説明に留まらない体系的なカリキュラムと教材（各テーマの解説・問題・課題・効果の検証）による授業実践が数多く展開し、報告されることを今後期待したい分野である。

参考文献

池田菜採子（2019）「上級日本語学習者が捉えた名古屋の言語景観」『ことばと文字』11 号、くろしお出版・公益財団法人 日本のローマ字社、 pp.58-69.

李慈鎬・李舜炯・ダニエル ロング・李承珉・磯野英治（2020）「言語景観を活用して人・地域・国の融合を目指して」、企画発表、韓国日本語学会 2020 年度第 41・42 回統合国際学術大会.

李舜炯（2019）「大学の通常の日本語授業における PBL 型言語景観調査の導入と学習者評価」、『日本語教育研究』48、韓国日語教育学会、pp.175-190.

磯野英治（2011a） 「韓国ソウルの国際化・多民族化に対応する多言語景観」 『日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム 多言語化する「地方」予稿集』、富山大学人文学部、pp.18-21.

————（2011b） 「韓国における日本語の言語景観－各都市の現状分析と日本語教育への応用可能性について－」 『世界の言語景観 日本の言語景観－景色のなかのことば－』、内山純蔵 監修・中井精一・ダニエル ロング 編、桂書房、pp.74-95.

————（2012） 「言語景観から読み解く多民族社会－韓国ソウル特別市における外国人居住地域からの分析－」『日本語研究』第 32 号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、pp.191-205.

————（2013）「言語景観を日本語教育に応用する視点」『日語日文学研究』第 86 集、韓国日語日文学会、pp.289-302.

————（2015a）「日本語教育に活用可能な言語景観の分類に関する考察」 『大阪大学国際教育交流センター論集 多文化社会と留学生交流』第 19 号、pp.35-41.

————（2015b）「身近にある言語景観を素材とした多文化クラスにおける教育実践」『日本語研究』第 35 号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、pp.193-200.

————（2019）「日本語教育に活用可能な言語景観と教育実践－理論と方法－」、中井精一 ダニエル・ロング 監修、 李舜炯 編 『都市空間を編む言語景観』、中文出版社（韓国大邱）、pp.183-206.

————（2020）『言語景観から学ぶ日本語』、大修館書店.

————（2021）「言語景観の教材化と授業実践－異文化コミュニケーション科目におけるビデオ教材・教科書の活用－」『日本語学研究』第 67 輯、韓国日本語学会、pp.107-117.

磯野英治・上仲淳（2014） 「大阪道頓堀の多言語景観－外国人に向けた民間表示を中心に－」『日本語研究』第 34 号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教

育研究会、pp.137-144.
磯野英治・上仲淳・大平幸・田中真衣（2016）「大阪日本橋の多言語化と地域的特徴－電気とサブカルチャーの街の言語景観－」『日本研究』Vol.41、韓国中央大学校日本研究所、pp.89-103.
磯野英治・上仲淳・田中真衣（2018）「電気とサブカルチャーの街『名古屋大須』の言語景観－大阪日本橋との比較研究－」『日本語研究』第 38 号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、pp.75-83.
磯野英治・西郡仁朗（2015） 「ビデオ教材『東京の言語景観－現在・未来－』の制作と公開」 『日本語教育学会 2015 年度春季大会予稿集』、pp.259-260.
磯野英治・西郡仁朗（2017）「ビデオ教材『東京の言語景観－現在・未来－』の公開と教育実践」『日本語教育』166 号、日本語教育学会、pp.108-114.
磯野英治・西郡仁朗 監修（2019）ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』、2017 年度～2019 年度科学研究費若手研究(B)研究課題番号 17K13490「言語景観を教材とした社会文化的理解を目指す内容重視型日本語教育の研究」（研究代表者：磯野英治）（https://youtu.be/qB0-eSC_yUQ）
磯野英治・引田梨菜・豊國祥子・李恵・Andina Permatawaty・Astiya Hadiyani・Wistri Meisa・Sustia Fattiska・Rosi Rosiah（2013）「首都東京におけるインドネシア語の言語景観の展開－公共表示・民間表示に注目した事例調査－」『日本研究』Vol.34、韓国 中央大学校日本研究所、pp.343-356.
上仲淳・田中真衣・磯野英治（2019）「大阪道頓堀の国際化と多言語景観 」『ことばと文字』11 号、くろしお出版・公益財団法人 日本のローマ字社、 pp.70-79.
内山純蔵 監修、中井精一・ダニエル ロング編（2011）『世界の言語景観 日本の言語景観』、桂書房.
鎌田美千子（2014）「言語景観に着目した漢字テキスト作成の実践と課題－PBL の手法に基づいて－」『日本語教育方法研究会誌』Vol.21.No2、日本語教育方法研究会、pp.50-51.
くろしお出版・公益財団法人 日本のローマ字社（2019）『ことばと文字』11 号.
甲賀真広（2019）「短期日本語研修における自発的学習を促す言語景観調査」『都市空間を編む言語景観』、ダニエル ロング・中井精一 監修、李舜炯 編、中文出版（韓国）、pp.207-229.
庄司博史・ペート・バックハウス・フロリアン・クルマス（2009）『日本の言語景観』 、三元社.
大修館書店（2021）『月刊英語教育』1 月号、第 69 巻第 11 号.
田中ゆかり・早川洋平・冨田悠・林直樹（2012）「街のなりたちと言語景観－東京・秋

葉原を事例としてー」『言語研究』142 号、日本言語学会、pp.155-169.
西郡仁朗・磯野英治 監修（2014）ビデオ教材『東京の言語景観ー現在・未来ー』、東京都アジア人材育成基金（https://www.youtube.com/watch?v=NHV338g_NBo）.
西郡仁朗・黒田史彦・福田寺紫陽・市川紘子（2016）「東京の言語景観と留学生から見た多言語対応状況ー2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けてー」『人文学報』第 512-7 号、首都大学東京、pp.95-111.
本田弘之・岩田一成・倉林秀男（2017）『街の公共サインを点検するー外国人にはどう見えるかー』、大修館書店.
正井泰夫（1972）『東京の生活地図』、時事通信社.
ロング ダニエル・李舜炯・磯野英治・甲賀真広・斎藤敬太（2021）「地域における言語景観研究」企画発表、韓国日本語学会 2021 年度第 43・44 回統合国際学術大会.
ロング ダニエル・甲賀真広・李舜炯・磯野英治（2019）「日本語教室と世界をつなげるー言語景観の活用方法を探るー」、企画パネル発表、韓国日語教育学会 2019 年度第 35 回国際学術大会.
ロング ダニエル・中井精一 監修、李舜炯 編（2019）『都市空間を編む言語景観』、中文出版社.
ロング ダニエル・斎藤敬太（2022）『言語景観から考える日本の言語環境ー方言・多言語・日本語教育ー』、春風社.
ロング・ダニエル（2010）「奄美ことばの言語景観」『東アジア内海の環境と文化』、金関恕監修、内山純蔵・中井精一・中村大 編、桂書房、pp.174-199.
————（2014）「非母語話者からみた日本語の看板の語用論的問題ー日本語教育における『言語景観』の応用ー」『人文学報』第 488 号、首都大学東京人文科学研究科、pp.1-22.
————（2017）「語学授業に興味を持ってもらう ―ツールとしての言語景観―」『首都大学東京教職課程紀要』1、pp.79-89.
————（2019）「日本語学習者を悩ませる言語景観」『都市空間を編む言語景観』、ダニエル ロング・中井精一 監修、李舜炯 編、中文出版社、pp.257-271.
Inoue, Fumio (2005) Econolinguistic aspects of multilingual signs in Japan. International Journal of Sociology of Language 175/176, pp.157–177.
Landry, R. & Bourhis, R.Y. （1997）Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: an empirical study. Journal of Languages and Social Psychology 16, pp.23-49.
George Yule 著　今井邦彦・中島平三訳(1987)『現代言語学 20 章ーことばの科学ー』大修館書店.

付記

本稿は西郡仁朗先生（東京都立大学）のご退職に伴う招待講演「言語景観を活用した日本語教育研究の今までとこれから」（TMU 日本語・日本語教育研究会 第 14 回研究大会、2021 年 12 月）を加筆・修正したものである。貴重な意見やアドバイスをくださった方々に感謝申し上げる。

なお本研究は、2020 年度～2023 年度科学研究費（若手研究）研究課題番号 20K13093「言語景観を活用した多文化社会への支援に資する内容重視型初級日本語教育教材の開発」（研究代表者：磯野英治）の成果の一部である。

（いその　ひでは る・名古屋商科大学 国際学部）